

# 近世後期上方歌舞伎における囃子方

## ——役者・小屋との関係性——

武内 恵美子

近世後期の上方歌舞伎に関係していた囃子方は、どのような出演形態であったのか。また何がその要因を決定していたのだろうか。従来通説として、役者との関係によって決定していたと考えられることが多かったが、実態は解明されていない。本稿は、歌舞伎役割番付記載の情報を主成分分析・クラスター分析・ソーシャルネットワーク分析を行うことによって、内在している出演への因果関係を明らかにすることを目指した。

その結果、義太夫節と長唄ではその傾向が多少異なることが判明した。義太夫節は複数の囃子方と役者との関係が見られ、かつ役者は組織的なものではなく個人的な関係が強い。一方長唄は単独の囃子方と役者の組織との関係が見出せた。また役者・小屋（劇場）の両方を変数として分析した結果、どちらかに偏ることなく、ほぼ同程度の成分として抽出された。そこからは、囃子方の出演形態が役者・格・小屋のいずれかとの関係で決まるのではなく、柔軟に対応していたことが見出せた。

キーワード：上方歌舞伎、囃子方（演奏者）、役者、小屋（劇場）、主成分分析

### はじめに 近世上方歌舞伎における囃子方研究

近世すなわち江戸時代の上方歌舞伎において、囃子方<sup>(1)</sup>がどのように興行に関わっていたのかという問題は、研究があまり進んでいない分野であると言わざるを得ない。根岸正海氏の『宮古路節の研究』において、正本を基に近世中期の宮古路節の活動傾向について研究された中で、上方についても言及された。根岸氏に続き、筆者は拙著『歌舞伎囃子方の楽師論的研究』において、上方の歌舞伎役割番付<sup>(2)</sup>を中心的史料として、豊後系浄瑠璃・長唄・義太夫の囃子方について体系的に考察した。筆者はその後、拙稿「近世大坂の説経讀語芝居における演奏者」、「統計解析を用いた歌舞伎演奏者の活動傾向に関する研究（1）近世上方歌舞伎の場合」、「近世後期上方歌舞伎における囃子方の活動傾向に関する一考察」を発表し、拙著で考察しきれなかった囃子方の活動傾向の解明を行ってきた。

一方、前島美保氏は「上方歌舞伎囃子方の諸相—近世前中期の顔見世番付に基づいて—」や博士論文『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究：囃子方を中心に』において、近世前中期の囃子方について、上方歌舞伎の顔見世番付<sup>(3)</sup>から考察された。近世前中期は役割番付の残存率も悪く、拙稿でも詳細には解明しきれなかった部分であった。役割番付よりも詳細な情報を掲載している顔見世番付を使用した前島氏の論考により、初期の囃子方の活動傾向が詳らかとなった。また屋号や能役者との関係等、新たな視点も追加され、具体的な囃子方の動向を探求された。

また、竹内道敬氏は『続近世邦楽考』で上方の正本の考察を行っている。上方の正本研究も史料の量及び質的問題から滞っている分野であるが、氏は収集された正本を分類し、そこから版元やその変遷、記載事項等について初めて系統立てて明らかにされた。

しかし、上方歌舞伎における囃子方の存在形態研究は依然として解明が進まない。それには上方歌舞伎の実態が不明なままであることが大きな要因となっていると考える。上方歌舞伎は江戸歌舞伎と異なり、小屋（劇場）・

劇団を率いる座本・興行の権利を有する興行主が全て異なるとされる。さらに座組は、江戸では通常1年の契約が有効であるが、上方では座組が1年続くことはなく、数回の興行の後、途中で解体していたとされる。解体されると新たに座を組み直し、興行されることになるが、それも規則的ではなく流動的であったとされる。したがって、座を追うことは非常に難しく、須山章信氏が『江戸後期上方劇壇の研究』等で探求されているものの、実態はほとんどつかめていないと言わざるを得ない状況である。座とともに活動していた囃子方の実態の把握は、歌舞伎の興行実態が不明な状態では不可能に近い。

しかし、実際に興行された芸能であるからこそ、単なる伝聞による解釈ではなく、その実態を解明することには大きな意味があると考えられる。これは単純に囃子方の出勤状況の解明で終わる問題ではない。そこから興行システムの形態が解明されることで、様々な事象が解明できる可能性があるのである。例えば、興行の体面と実際の相違から見える内情解明もさることながら、当該地域の特徴や周辺地域との関係や影響、流派の実態解明やその組織構造、ひいては素人も含めた音曲界の存在形態の解明にもつながる可能性がある。また、囃子方の実態からは、上演演目の傾向やその要因、音楽ジャンルの作品傾向や他のジャンルとの関係性の解明にもつながる可能性がある。時期によって異なると想定される囃子方の歌舞伎への関わりや歌舞伎内での囃子方への対応もしくは態度、地域性による相違等の把握は、歌舞伎興行における音曲の在り方が克明に顕在化されると考える故である。

しかし、現代の興行システムをそのまま近世に適用できるわけではない。江戸時代に幕府によってある程度規制された状態で運営されていたものには、それ相応のシステムが存在したはずだと考える。そこで構築され、習慣化したものが、規制が消滅し、自由に興行できるようになった近代においても基礎になっているはずである。したがって、近世の囃子方の実態を解明することは、近代以降の囃子方の動向解明にも必須であると考えられる。

そこで、筆者はこれまで囃子方の実態把握を行うために、役割番付記載の情報を統計手法によって解析する試みを行っている。本稿でも以下、統計解析によって、実際の興行の在り方を探ることにする。

## 1. 統計解析による囃子方の解明

筆者は前掲の拙著および拙稿において、統計解析を用いて囃子方の実態考察を行ってきた。番付史料の情報を単に時系列に並べるだけでなく、統計解析によりそこに内在する情報を読み取ることで、囃子方の活動実態が克明に検出できると考えるためである。基礎統計およびソーシャルネットワーク分析<sup>(4)</sup>、主成分分析<sup>(5)</sup>によって究明している。

拙著では、上方歌舞伎における囃子方の活動を、役割番付記載の情報を基礎統計によって、近世後期に至って長唄が上方歌舞伎に定着すると同時に、上方独自の囃子方が出現し、流派を確立して活動していたことを見出した。義太夫節にも独自の囃子方が存在したこと、人形浄瑠璃との関わりが見られること等を看取した。また、ソーシャルネットワーク分析によって、囃子方はそれぞれ一定のグループを形成し活動していたこと、座や座の格によって活動傾向に相違が見られることを解明した。

拙著において、囃子方の共演関係を調査することで、その動向では小屋と格による分類が可能であると結論づけられた。一方、拙著では解明できなかった、流動的な上方歌舞伎興行の中で囃子方が実際にはどのように活動していたのかという問題について、役割番付に記載された小屋の情報と囃子方の情報を統合し統計解析によって実態把握を試みたのが拙稿「統計解析を用いた歌舞伎演奏者の活動傾向に関する研究(1) 近世上方歌舞伎の場合」である。ここでは主成分分析を使用し、小屋と囃子方との関係を考察した。その結果、大芝居格の小屋である角座、中座と囃子方の関係が強固に見出せた。

一方、劇団としての座と囃子方との関係を調査したのが拙稿「近世大坂の説経讀語芝居における演奏者」であ

る。説教讀語芝居に出演した囃子方についてソーシャルネットワーク分析を用いて考察した。説教讀語芝居とは、主に近世後期の大阪で活動していた小芝居<sup>(6)</sup>（子供芝居<sup>(7)</sup>）で、幕末に至り急速に発展した芝居興行団体である。近江の関蟬丸神社を本拠地とした一団であり、一般的な歌舞伎興行とは異なる形態を有していた。歌舞伎興行が座（劇団）によって運営されるのであれば、その一種である説教讀語芝居の状況を見ることにより、その一端が解明出来るのではないかと考えたのである。結果的に、説教讀語座のみに出演する固有の囃子方、またはほぼ説教讀語座に出演する準固有の囃子方が一定数存在することを見出したが、その他大多数の囃子方は他の一般的な歌舞伎興行にも出演していた。また、固有・準固有の囃子方がその範囲で共演関係を強く示す傾向はなく、かつ、それらの囃子方が説教讀語座における中心的存在というわけでもないことが判明した。また義太夫節では小屋固有の囃子方は見られなかったが、長唄では同姓のグループと小屋に特化した活動傾向が顕著に見出せた。

ただし、これは1団体における囃子方同士の共演関係を中心に分析したものであった。説教讀語座は非常にわかりやすい劇団であり、追跡が容易であったが、一般的な歌舞伎興行における座の形態は未詳である。しかし、囃子方は役者と関係すると一般的に考えられている。そこで、拙稿「近世後期上方歌舞伎における囃子方の活動傾向に関する一考察」において、近世最末期の一般的な歌舞伎興行における役者と囃子方の関係を、ソーシャルネットワーク分析によって考察した。役者同士のソーシャルネットワーク分析によって検出した5つのグループと、役者と囃子方（長唄・義太夫節）の分析で検出できたグループを比較すると、ほぼ一致した。すなわち、中心的な囃子方が特定の役者（グループ）との関係を示したということになる。ただし、ソーシャルネットワーク分析のみによる解析だったため、関係性は見出せたが、詳細な相関関係や要因は考察できなかった。そこで、本稿では、さらに主成分分析を実施することによって、グループ及び個人の間に関わる相関や因果関係、具体的な動向について探求することを目的とする。

## 2. 主要史料と分析方法

### 2.1 基本資料

本稿では、役割番付を主要史料として分析を行う。近世後期の上方では、座組が1年を通して保持する力はなく、数回で解体し再編するといわれている。したがって顔見世番付では1年の興行実態を追うことが出来ない。一方役割番付は、関係者全員は掲載しないが、興行毎の発行であるので、主要人物の実態を把握することができる。また、本稿で扱うような実態解明は、その芝居の責任者的な役割を果たす、代表的な囃子方の動向を把握することを目的としており、1回から数回しか名前が見られないような囃子方までを対象としてその動向を詳らかにすることは求めている。したがって、掲載されている中でも一定数以上の記載がある人物を対象とする。また役割番付は、年月日、場所、座本、頭取、演目、主要役者名、主要囃子方名等、分析に必要な不可欠な情報は基本的に全て掲載されている。したがって、本稿では顔見世番付ではなく役割番付を使用する。

### 2.2 対象時期

2007年以降の拙稿は全て近世最末期の10年間、すなわち安政5年（1858）から慶応3年（1867）を対象期間としている。それは、天保の改革が終了し、大阪において宮地における歌舞伎興行が全面的に再興される時期であり、それに伴って宮地や新地における小芝居が急増する時期であるからである。芝居の急増に呼応して役割番付の点数も前の10年と比較して約1.4倍も増加している。以上のことから、本稿でもこの10年を対象時期とする。

## 2.3 対象地域

対象時期である江戸最末期の上方歌舞伎は、京都でも興行されてはいるが、中心地は大坂になっていた。また堺等、周辺地域でも興行されていたが、それらを含めると地域の扱いが煩雑になるため、本稿では対象地域を大坂の恒常的に興行が行われていた芝居地（小屋）とした。すなわち、道頓堀5座（角・中・筑後・若太夫・竹田）、新地2座（堀江・北新地）、宮地5座（天満・いなり・御霊・座摩・阿弥陀池）の12カ所である。また、大坂の範囲内でも寄進や勧進等のために上記12カ所以外で行われたものは除外した。

なお、天満は大坂天満宮の境内で行われていた芝居であるが、これについては場所から判断して宮地を含める場合と、他の宮地芝居とは別格とされ新地格とする場合がある。また、天満や新地では、大芝居格の座が大芝居として興行することもあったが、番付上は区別が難しいこと、煩雑になることから、それらの区別は特に考慮しなかった。

## 2.4 対象音曲、人物

上記の通り、時期・地域・史料を設定し、対象となる役割番付を抽出した。番付点数は422点であり、各小屋の内訳は表1の通りである。なお、422点の番付中、長唄の囃子方が記載されているものは404点で全体の約95.7%、義太夫節の囃子方が記載されているものは412点で全体の約97.6%にあたる。ともに95%以上の記載率であるので、当該番付の全容がほぼ捉えられることになる。

422点の役割番付記載情報から囃子方名と役者名を抽出した。具体的には、囃子方は、記載されている長唄・義太夫節の囃子方のうち、本稿では唄（長唄）と太夫（語り）を対象とし、長唄三味線、義太夫節の三弦については今回は除外した。役者については、役割番付中に太字で記載されている人物で、同一番付内に3回以上名前がある者、または記載が2回でも他よりも大きく書かれている人物を対象とした。この基準で選択すると、役者は1点の番付で7名から12名程度の代表的な役者を抽出することができる。それらを基に、囃子方の場合には10年間で10件以上の出現、役者の場合は10年で20件以上の出現を最低ラインとして設定し、代表的な囃子方および役者を抽出した。その結果が表2である。囃子方としては、長唄が74件出現の玉村久楽を筆頭に、花房半七、玉村巳午蔵、岩崎松之助、花房半吉、中村兵次、花房虎蔵、中村伊三郎、岩崎徳次郎、花房留次郎、岩崎熊太郎の11名、囃子方は合計26名である。義太夫節は、52件出現の竹本勇太夫を筆頭に、竹本琴太夫、竹本倭太夫、竹本三木太夫、竹本鶴太夫、竹本折太夫、竹本寿太夫、竹本程太夫、竹本岡島太夫、竹本若太夫、竹本歌間太夫、葉璃摩一風、竹本千代太夫、竹本瀧太夫の15名である。役者は52件出現の中村駒之助を筆頭に、市川団次郎、市川米蔵、中村雀右衛門、市川瀧十郎、中村仲助、中村紫若、実川延三郎、浅尾朝太郎、中村千之助、三舛梅舎、尾上多見蔵、市川市十郎、三舛源之助、嵐三幸、中村翫雀、尾上松緑、市川寿太郎、浅尾奥山、浅尾玉六、嵐大三郎、嵐吉三郎、実川延若、嵐京花、中山みよじ、中村政次郎、嵐徳三郎、藤川鐘九郎、中村橋之助、中村己之助、市川筆之助、中村芝蔵、嵐和橋、中村琴三郎、実川勇次郎、片岡我当、嵐舎丸、嵐鱗子、市川鯉三郎、実川延太郎、大谷友松、中村玉芝、中村梅蔵、嵐三右衛門の55名である。この代表的出演者の情報を基に、主成分分析を実施した。

## 3. 義太夫節

### 3.1 太夫一役者の主成分分析

義太夫節の太夫15名に対し、役者55名との関係数を変数として主成分分析を実施した。抽出の基準として最小の固有値を1としたところ、表3のように固有値1以上で8つの成分が抽出された。表4、因子のスクリープ



ロットでは第3主成分までの傾斜が大きく、第4主成分以降とは傾斜の度合いが大きく異なるが、表3を見ると、第1主成分の固有値は約28.34%、第2主成分は約17.53%、第3主成分は約11.89%、第4主成分は約10.27%であり、第5主成分からは約8.29%と一桁に落ちること、第4主成分までで全体の約76.32%が説明出来ることとなるため、第4主成分までを採用することとし、4つの要因として考察を進めることにする。

次に成分行列を作成したが、成分が少々煩雑で解釈が難しかったため、バリマックス回転<sup>(8)</sup>を実施した。その結果が表5の成分行列表である。表5は成分を解釈しやすくするために負荷量の最小絶対値を0.3に指定し、0.3以下は表示せず、サイズによる並べ替えを実施している。

第1主成分として抽出されたのは、片岡我当・浅尾奥山・中村千之助・三舛梅舎・嵐徳三郎・尾上多見蔵の6名であった。第2主成分として抽出されたのは、嵐和橋・市川寿太郎・嵐京花・浅尾玉六・嵐三幸・中山みよじ・藤川鐘九郎・中村己之助の8名であった。

第3主成分として抽出されたのは、中村翫雀・尾上松緑・市川筆之助・中村芝蔵の4名であった。第4主成分として抽出されたのは、中村政次郎・三舛源之助・嵐舎丸・中村梅蔵・市川鯉三郎・市川市十郎の6名であった。

以下、主成分としての採用は見送ったが、第5主成分としては中村橋之助・中村玉芝・実川延太郎の3名、第6主成分としては嵐吉三郎・嵐鱗子・嵐吉右衛門・実川勇次郎の4名、第7主成分としては嵐大三郎・大谷友松の2名、第8主成分として中村琴三郎1名が抽出されている。

これらの結果を、拙稿(2011)にてソーシャルネットワーク分析を実施した際に作成した役者同士の共演関係図と照合してみると、若干の相違点が見て取れた。役者同士の14回以上の共演関係図(図1)ではAからFまでの6グループが見出せていたが、今回の主成分分析では8成分が検出されている。主成分の構成員と照合すると、Aグループとしたものの中には第6主成分の嵐吉三郎・嵐鱗子・実川勇次郎が含まれているため、第6主成分と関係すると考えられる。ただし、Aグループとして検出されているその他4名は第6主成分とは関係なく、かつそのうちの1名である嵐大三郎は第7主成分の構成員である。したがって、厳密に言えば、Aグループが第6主成分であるとするのは難しいかもしれない。

Bグループとしたものは第1主成分の片岡我当・浅尾奥山・中村千之助・三舛梅舎・尾上多見蔵が含まれており、かつ第1主成分と関係ない人物として市川瀧十郎1名が含まれている。市川瀧十郎以外は全員第1主成分の構成員であることから、第1主成分とほぼ同一であると考えられる。

Cグループとしたものは、第3主成分の中村翫雀・尾上松緑・市川筆之助の3名で構成されているため、完全に第3主成分と見なすことができる。またEグループとしたものも、第5主成分の中村橋之助・中村玉芝・中村延太郎の3名で構成されているため、これも第5主成分と見なすことができる。

Fグループとしたものは、第2主成分の嵐京花・浅尾玉六・嵐三幸が含まれている。しかし一方で第2主成分とは関係のない人物が同数の3名含まれている。また第2主成分の構成員は8名であるが、Fグループにはそのうち3名しか関係せず、かつ回数を下げても役者同士のグループ構成員は変化しない。したがって第2主成分と同一とは言いがたいが、関係性はあると見ることはできるのではないかと考える。

第7主成分の役者は、嵐大三郎1名のみがAグループの端に連なっており、もう1名の構成員である大谷友松は関係図上を離れている。しかし、この2名は共演回数を11回まで下げると、独立したグループは形成しないものの関係を見せることから、かろうじて共演関係図からも成分を見出すことができる。

しかし、第4主成分を構成している役者は、14回の共演関係図ではすでに全員が関係図上に残っておらず、また、回数を下げても関係性を見出せない。つまり、共演関係図からは第4主成分は見出すことができない。また、第8主成分の中村琴三郎も共演関係図では特徴的な動きは見せない。

一方、Dグループは、8つの主成分には該当しない役者2名によるグループである。

つまり、成分別にまとめると次のようになる。第1主成分はBグループとほぼ同一、第2主成分はFグループ

と関係するが完全一致とは言い難い。第3主成分はCグループと一致、第4主成分は該当するものがなかった。第5主成分はEグループと一致、第6主成分はAグループと部分一致、第7主成分はAグループの第6主成分以外の部分で一致、第8主成分は該当なし、となった。役者のグループが6つに形成されていたため第8主成分まで検討したが、本来採用すべき第4主成分までの状況をも、役者同士の共演関係と主成分については、完全に一致するものではないことがわかった。これらの主成分は太夫の出演の内在要素として役者をとの関係を分析しているものである。それを踏まえた上でこの結果を見る限り、太夫の出演の要因と役者の団体とは完全には一致しないということが判明したと言えるだろう。

次に、太夫と役者との共演関係図と主成分を検討する。拙稿（2011）では共演回数11回を最終段階と見なしていたが、それではほとんどの主成分が説明できなかつたため、7回まで回数を下げて検討した。図2が7回以上の共演関係図と第4主成分までの対応結果の図である。

第1主成分の構成員は図の右側に全員を確認することができた。第1主成分の役者は全員が竹本寿太夫・竹本折太夫と、一部が葉璃摩一風と関係していることが見出せた。したがって第1主成分はこの3名の太夫によるものと考えることができる。

第2主成分の構成員は、図の左側に浅尾玉六を除いた全員を確認することができた。第2主成分の構成員全員と関係する太夫はこの図では見られないが、それらの一部と関係する太夫として、竹本三木太夫・竹本琴太夫を検出できた。浅尾玉六はこの7回の関係図では下部に位置し、竹本勇太夫とのみ関係をみせているが、共演回数を下げると5回の共演で竹本三木太夫・琴太夫と関係を見せた。したがって、第2主成分の構成員全員が竹本三木太夫または竹本琴太夫との関係を示したことになる。したがって第2主成分はこの2名の太夫によるものと考えることができる。

第3主成分の構成員は、図の上部に全員を確認することができた。第3主成分の役者は全員が竹本歌間太夫と、一部が竹本三木太夫と関係を見せた。したがって第3主成分はこの2名の太夫によるものと考えることができる。

第4主成分の構成員は、図の下部に、嵐舎丸を除いた全員を確認することができた。図上に見られる全員の構成員と関係する太夫はいないが、一部が竹本勇太夫・竹本鶴太夫と関係を見せた。また7回の図上では誰とも関係を見せない嵐舎丸は、5回まで回数を落とすと竹本鶴太夫と関係したことから、第4主成分の構成員全員が竹本鶴太夫または竹本勇太夫との関係を示すことが判明した。したがって、第4主成分はこの2名の太夫によるものと考えることができる。

ちなみに、第5主成分は竹本倭太夫と、第6主成分は竹本倭太夫または竹本岡島太夫と、第7主成分は竹本為太夫と、第8主成分は5回まで落とせば竹本勇太夫と、構成員全員が関係を示した。

これらのことから、太夫と役者との関係を見出すための主成分分析からは、特定の太夫の役者との関係によって生じていること、関係性の事象として検出されたのは役者個人であり、役者のグループではない可能性が明らかとなった。

### 3.2 太夫一役者・小屋の主成分分析

それでは、拙稿（2007）において、小屋との関係性を主成分分析にて考察したものとはどのように検討すべきだろうか。それを解明するために、続いて、役者と小屋の両方を変数として主成分分析を行った。

分散の結果は表6の通りである。抽出の基準として、役者のみの場合と同様に固有値を1とし、10の成分が抽出された。表7、因子のスクリープロットを見ると第4主成分までの傾斜の幅が大きく、第4主成分と第5主成分の間の傾斜が緩やかになる。表6では第3主成分の固有値が約11.29%、第4主成分は約9.49%、第5主成分は約9.16%で、第4主成分と第5主成分の間の差が小さくなることから、第4主成分までを採用することとし、4つの要因として考察を進めることにする。第4主成分までで全体の役66.37%を説明できることになる。

次に太夫・役者の分析と同様に、バリマックス回転を実施し成分行列を作成した。その結果が表8の成分行列表である。

第1主成分として抽出されたのは、嵐和橋・嵐京花・市川寿太郎・北新地・天満・阿弥陀池・嵐三幸・中村己之助・中山みよじ・藤川鐘九郎であった。これは役者のみで実施したときの第2主成分に属していた役者群であるが、浅尾玉六が抜けており、小屋成分として北新地・天満・阿弥陀池が入っている。また成分数値が変化したことにより、役者の順序が入れ替わっている。小屋情報を入れたために様々な変化が生じたと考えられる。

第2主成分として抽出されたのは、片岡我当・浅尾奥山・角・中村千之助・三舛梅舎・嵐徳三郎・尾上多見蔵である。この構成員は、役者のみの分析における第1主成分の構成員そのままであるが、小屋成分として角（座）が入っている。つまり、小屋情報を付加することで第1主成分と第2主成分が入れ替わった形になった。

第3主成分として抽出されたのは、中村政次郎・御霊・三舛源之助・嵐舎丸・若太夫・中村梅蔵・市川市十郎である。ここに属する役者は、役者のみの分析における第4主成分の構成員であるが、市川鯉三郎が抜け、小屋成分として御霊・若太夫が入っている。同一成分内における順序の移動はなかった。

第4主成分として抽出されたのは、嵐吉三郎・嵐倫子・中・実川勇次郎・嵐吉右衛門である。ここに属する役者は、役者のみの分析における第6主成分の構成員そのままであるが、順序が一部入れ替わっている。また小屋成分として中（座）が入っている。

ここまでが採用する主成分であるが、役者のみの分析と順序が入れ替わっているため、以下第10主成分まで簡単に説明しておく。第5主成分は役者のみの際の第3主成分を構成していた役者で、増減はないが順序が入れ替わっている。小屋成分の追加はない。すなわち、ここまでで初めて小屋成分が入らない主成分が出現したことになる。第6主成分は役者のみの際の第7主成分を構成していた役者で、増減も順序の入れ替わりもないが、小屋成分として堀江・筑後が入っている。第7主成分は役者のみの際の第5主成分を構成していた役者で、増減も順序の入れ替わりもなく、かつ小屋成分も追加されなかった。第8主成分は役者のみでも第8主成分を構成していたものであるが、第4主成分に入っていた市川鯉三郎が挿入され、小屋成分としては竹田と稲荷が入っている。第9主成分は、役者のみの分析の第7種成分と第8種成分の間に存在したが数値的にどちらにも入れられなかった人物であったが、今回の分析では1つの成分を形成した。ただし順序は逆転している。また小屋成分として稲荷が挿入された。第10主成分は役者のみの分析の第2主成分に属していた浅尾玉六が独立して、座摩と結合して形成されたものである。

以上から、小屋の成分を変数に組み込んだことで、全体的に成分の順位、役者の異動、成分内での順位変更が生じていることがわかる。また、小屋の成分に注目してみると、第1主成分には北新地・天満・阿弥陀池、第2主成分には角、第3主成分には御霊・若太夫、第4主成分には中、第6主成分には堀江・筑後、第8主成分には竹田・稲荷、第10主成分には座摩が分類された。このことから、役者のみ、あるいは小屋のみで太夫の動向が規定されるわけではないことが読み取れる。また、それぞれの主成分に属する役者と小屋との関係性も生じている可能性を示している。ただし、第5・第7・第9主成分には小屋が入っていないことから、必ずしも役者と小屋が一致することを示す訳でもないこともわかる。しかし、今回の主成分分析で採用する第4主成分までは全ての成分中に小屋がはいっている。

小屋についてももう少し詳細に検討すると、第1主成分に属している北新地・天満・阿弥陀池に共通するのは、道頓堀以外ということである。ただし、北新地と天満は、新地格あるいは道頓堀および大芝居格に準じる扱いをされることもあり、注意が必要である。一方、阿弥陀池は宮地であり、かつ、宮地の中でもあまり活発に興行されない小屋であり、他の2小屋とは少々性格を異にする。これについては、さらに他の史料によって分析が必要であらう。

第2主成分に属している角（座）は、拙稿（2007）では第1主成分、第4主成分に属している中（座）は、第2

主成分であった。この2つの小屋は幕末まで大芝居格として存在しており、大坂の芝居地の中でも最も重要な小屋である。表5と表6での成分の変動も含めて、役者と小屋を見た場合に何が生じているのかは注意深く判断する必要があるだろう。

第3主成分に属している御霊と若太夫は、御霊が宮地、若太夫が道頓堀の小芝居格である。どちらも大芝居格ではないということでは一致しているが、格としては若太夫の方が上であり、なぜこの2カ所が同一の主成分になるのかを解釈する必要がある。また、表5では同一内に属していた浅尾玉六が抜け、座摩とともに独立成分を形成したことも特筆すべきであろう。第3主成分に御霊と座摩が入るという傾向を示さなかったこともまたひとつの特徴と言えるだろう。そのように考えると、稲荷・座摩・御霊・阿弥陀池の宮地4地は、どこも他の宮地との同一性を示さないこともわかる。一方で新地芝居は、例えば天満を新地と見なすならば、北新地と同一性を示したことになる。これは宮地と新地の相違点とすることもできるかもしれない。また、角・中の大芝居は、他の芝居地との共通性を見せないという傾向も見て取ることができた。芝居地の解釈は他の史料で補いつつ、さらに進める必要がある。

以上、役者のみ、役者・小屋の2種類の主成分分析を行った結果、次のようなことが判明した。

第1に、役者のみと小屋入りでは、形成される主成分や順序が異なる。

第2に、役者のみ、小屋のみのような独立した成分を形成しない傾向が強い。

第3に、角・中の大芝居格の2座は、他の小屋とは同一の主成分を示さない。

第4に、新地は同一主成分内への配分が生じる可能性がある。

第5に、宮地同士は同一主成分内には属さない。

第6に、役者の傾向は、小屋入りでもほぼ引き継がれる。

これらのことから、太夫が歌舞伎に関わる絶対的な要因として、役者または小屋あるいは格のどれか1点に限られるものではないということが検証された。また、今回は大きくは触れなかったが、これらの主成分に挙げられた役者は、役者評判記で見ると、全てが座の中心的存在というわけではない。逆に言えば、役者評判記で巻頭に挙げられる役者とは関係性が希薄であった。ただし、図2で検討したように、歌舞伎興行に関わる中心的な太夫と関係を示す役者であることは判明した。なぜこれらの役者と太夫に関係性が生じるのかは、今後さらに検討が必要であろう。

## 4. 長唄（唄）

### 4.1 長唄—役者の主成分分析

続いて長唄の唄方と役者による主成分分析を考察する。

長唄の唄方に対し、役者を変数として主成分分析を行ったところ、表9のように8つの主成分が検出された。表10のスクリープロットと共に判断すると、第3主成分と第4主成分の間で傾斜傾向に変化が生じる。また表9の固有値を見ると、第3主成分は約13.87%、第4主成分は約9.16%と、大きく差が開き、第4主成分で一桁になることから、第3主成分までを採用し、3つの要因として考察を進めていくことにする。第3主成分までで全体の約69.36%が説明できることになる。

次に太夫の分析と同様に、バリマックス回転を実施し成分行列を作成した。その結果が表8の成分行列表である。負荷量の最小絶対値を0.3に指定し、0.3以下は非表示とし、サイズによる並べ替えを行った。

第1主成分として抽出されたのは、市川鯉三郎・市川寿三郎・中村琴三郎・嵐京花・中村翫雀・市川筆之助・尾上松緑・大谷友松・中村芝蔵・嵐三幸・市川団次郎・市川米蔵・嵐舎丸・市川市十郎・嵐大三郎の15名の役者で



ある。

第2主成分として抽出されたのは、中村千之助・三舛梅舎・浅尾奥山・市川瀧十郎・片岡我当・尾上多見蔵・嵐徳三郎・嵐鱗子・嵐吉三郎の9名の役者である。

第3主成分として抽出されたのは、実川勇次郎・嵐吉右衛門・中村雀右衛門・中村仲助・実川延三郎・中村橋之助の6名である。

これらの成分を判断するために、拙稿（2011）で使用した長唄（唄）と役者の共演関係図を参照する。拙稿（2011）では11回以上の共演関係図を最終段階としたが、この段階では図上に4つのグループが存在していた。もう1件上げ、12件以上とすると2つのグループが関係を解消し、2つのグループになるが、さらにもう1件上げて13件以上にすると大きいグループが分離し、3つのグループができることから、これを基に考察を行うことにする。図3は共演回数13回以上の長唄の唄と役者の関係図である。共演回数を上げたので、関係図上を離れてしまった役者が多いが、左側の上部、玉村久楽と関係を示す中村翫雀・尾上松緑は第1主成分に属する役者である。関係を遡ると、市川筆之助・市川寿太郎は12回、市川市十郎・嵐大三郎は11回、大谷友松は9回、市川鯉三郎・中村芝蔵・中村琴三郎は8回、市川団次郎・市川米蔵は7回、嵐舎丸は6回、嵐京花・嵐三幸は5回と、全員が玉村久楽と関係を有していた。したがって、第1主成分は玉村久楽と関係があるといえるだろう。

右側の花房半七を中心としたグループの役者を見ると、全てが第2主成分に属する者であることがわかる。また第2主成分のうち関係図を外れている嵐徳三郎は11回、嵐倫子は10回、花房半七との関係を示していた。つまり、第2主成分は花房半七と関係があるといえるだろう。

左側の下段、玉村巳午蔵を中心としたグループは、全員が第3主成分に属する役者である。また第3主成分のうち関係図上から外れている中村橋之助も、回数こそ1回と少ないものの玉村巳午蔵と関係を示した。したがって、第3主成分は玉村巳午蔵と関係があると考えられる。

また、採用はしなかったが、同様に調査したところ、第4主成分は全員が花房虎蔵と、第5主成分は全員が岩崎松之助と、第6主成分は全員が花房半吉と、第7主成分はマイナス値を示した三舛源之助以外は全員が花房留次郎と関係を示した。ただし、第8主成分の実川延太郎については、関係が希薄な上に特徴が見出せず、何故主成分として抽出されたのかはここからは読み取れなかった。

一方、それぞれ同一成分中の役者同士の関係を、図1から考察してみると、次のようなことが判明した。

第1主成分は15名の大所帯であるが、ここには図1におけるCグループ・Fグループの構成員と、早くから関係図上を離れ、あまり関係を示さない役者群の3つのグループによって形成されていることがわかった。Cグループ系は中村翫雀・尾上松緑・市川筆之助を筆頭として、回数を落とすと市川寿太郎・大谷友松・市川市十郎・嵐大三郎が属する結果となった。Fグループは嵐京花・嵐三幸・市川団次郎・市川米蔵の4名で、図1上の浅尾浅太郎・浅尾玉六はここには含まれない。関係を示さない役者群としては、市川鯉三郎・中村琴三郎・嵐舎丸である。このように、1成分中に複数のグループが含まれていることについて、検討の余地はあるものの、役者の大枠でのグループと一致する結果が認められたことは注目に値するだろう。

第2主成分の9名の役者は、ほぼ全員が図1におけるBグループの構成員であることがわかる。ただし嵐鱗子と嵐吉三郎の2名はAグループの構成員である。

第3主成分の6名の役者は、中村橋之助を除き5名がAグループの構成員であることがわかった。

このように、第3主成分までの構成員は、役者同士の関係も見出せながら、1人の囃子方との強固な関係を示すものであると判定できる結果となった。

## 4.2 長唄一役者・小屋の主成分分析

続いて、役者と小屋の両方を変数として主成分分析を実施した。

長唄の唄方に対し、役者と小屋の双方を変数として主成分分析を行ったところ、表11のように9つの主成分が検出された。表12のスクリープロットと共に判断すると、第4主成分と第5主成分の間で傾斜傾向に変化が生じる。また表11の固有値からは第3主成分が約12.67%、第4主成分が約8.48%に対し、第5主成分は約7.43%と、その差があまり見られなくなっていることから、第4主成分までを採用し、4つの要因として考察を進めていくことにする。第4主成分までで全体の約77.39%が説明できることになる。

次に、バリマックス回転を実施し成分行列を作成した。その結果が表13の成分行列表である。負荷量の最小絶対値を0.3に指定し、0.3以下は非表示とした。またサイズによる並べ替えを行った。

小屋の情報が増加されたことで、各主成分に変化が生じた。まず、主成分自体の順序が変動したカ所がある。役者のみの分析では第6主成分であったものが、こちらでは第4主成分となった。それと入れ替わるように、第4主成分であったものが、第6主成分に変化した。同様に、第8主成分であったものが第7主成分に、第7主成分であったものが第8主成分に入れ替わった。また、第7主成分に属していた嵐和橋が独立し、第9主成分を新規に形成した。何故そのような事態が生じるのかは不明である。

同一成分内の順序変動も生じた。ただし、全体的ではなく、第1主成分・第4主成分・第7主成分で起こっている。これらの成分には、構成員の変更も生じており、それが要因の1種とも考えられるが、一方で要因の変化があるにも関わらず、第3主成分や第6主成分のように同一成分内での順序変動は生じていないものもある。かつ、必ずしも減少あるいは増加のどちらかで生じているわけでもなく、その変動に規則性は見出せない。したがって、単に構成に変化が生じたために内部バランスに狂いが生じたという以外の理由は現在のところ考えられない。

各成分のほとんどに小屋も挿入された。第1主成分には若太夫・座摩・竹田・天満・堀江・北新地の6カ所、第2主成分には角（座）、第3主成分には中（座）、第4主成分には御霊、第5主成分には筑後、第7主成分には稲荷である。しかし一方で、第6主成分・第8主成分・第9主成分のように、小屋が入らない成分も生じた。3件なので規則として判断できるかは疑問であるが、小屋が追加されなかった成分はどちらも順位を下げている。また新規に追加された第9主成分もまた構成員は基は第7主成分であったことを加味すれば、順位が下がっていると見なせなくもない。

追加された小屋の分類については、第1主成分は道頓堀の小芝居・新地・宮地という構成である。少々広すぎるくらいはあるが、中芝居の系統と判断することができるかもしれない。一方第2主成分・第3主成分は角・中が単一で入っている。大芝居格2カ所は他の小屋とは同じ要素にならないようである。さらに、御霊・稲荷・座摩という三大宮地芝居の小屋もまた、同一要素としては組み込まれていないが、新地は堀江・北新地のように、同一主成分内に複数個所組み込まれることもあることがわかった。

以上のことから、長唄の唄の歌舞伎出演に関する要素としては、次のようなことが判明した。

第1に、役者のみ、役者・小屋の両方を変数に用いても、大きく変動することはないが、若干の変化が生じる。

第2に、同一主成分内に複数の囃子方が分類されることはない。

つまり、個々の囃子方と役者もしくは小屋との関係という結果となった。表14は、主成分得点をクラスター分析した結果のデンドログラム（樹形図）である。花房半七と中村兵次が早い段階でクラスター化されたが、それ以外はほとんどクラスター化せず、ほぼ単独形成であることがわかる。また表15のように、その形成段階の係数を見ても近接していないこともわかる。これらのデンドログラムからも、長唄の囃子方の活動は、代表的囃子方が協力し合うという形ではなく、それぞれが個人営業的に役者や小屋との関係を示すことがわかった。

第3に、出演の要因として、役者あるいは小屋のどちらかが大きく作用するのではなく、どちらの要因も働いていることが判明した。役者との関係は看過できないが、決してそれだけではなく、一定の小屋への関係性も有していると言えるだろう。役者がそのような傾向を示すためなのか、囃子方の傾向としてそのように見られるのかは、この分析では判断することはできない。いずれ役者のみの動向を明らかにすることで、その点も解明して

いきたい。

## 5. 囃子方の出演傾向

以上、義太夫節・長唄の両方について、役者と小屋を対象に分析を行った。拙稿（2011）と同様に、義太夫節と長唄では、その傾向が微妙に異なるものであった。例えば、義太夫節では1つの主成分に複数の囃子方が関係していたが、長唄ではそのようなことはなく、必ず1名のみとの関係性であった。これは、義太夫節と長唄の活動傾向の相違から生じるものかもしれないが、さらに検討が必要である。

また、主成分を構成する役者を、役者同士の関係性と照合してみると、義太夫節ではそれとは一致しない傾向が見えるのに対し、長唄ではほぼ役者のグループと一致するという傾向を見せた。ここからは、義太夫節は役者個人との関係、長唄は役者グループとの関係が要因にあると見ることができると考える。それが何を意味するのかは、今後の課題としたい。

一方で共通性も見出した。それは、役者・小屋の双方を変数とした場合の、小屋の成分の分布である。大芝居格である角（座）・中（座）はそれぞれ必ず単独で成分化され、同一成分内には他の芝居地は一切入らない。一方、新地は複数が同一成分内に入ることも珍しくはなく、かつ、往々にして宮地と同一成分化を示した。また宮地は、新地とは同一成分内に入ることがあるが、宮地同士は決して同一化しなかった。ここからは、芝居の格や性質というものが見て取れるのではないだろうか。すなわち、新地はあくまでも小芝居であり、稀に大芝居が行われたとしても、通常はやはり大芝居としての活動ではないということである。さらに、宮地と同一成分化するということが、宮地同士は同一成分化しないことを踏まえると、新地と宮地はやはり何らかの区分があったと考えられるのではないだろうか。少なくとも、囃子方の出演傾向において、その区分の傾向を見て取ることができると考える。

しかし、今回の主成分分析で抽出できた最大の要点は、義太夫節・長唄ともに、役者あるいは小屋・あるいは格という、どれか1つの要素が決定的な要因になるわけではないということが判明した点であろう。もし、それらの1つの要素が強いという内在的傾向を有していたとしたら、主成分の際にそれが顕著に表れたのではないだろうか。それが表面化せず、同一成分内に混在したということは、囃子方の活動傾向は、役者・格・小屋と緩やかに関係しながらも、フレキシブルな形態であったと考えるのが妥当である。

日本伝統音楽研究センター共同研究「歌舞伎の地方—伝承と演出、歴史と現在—」において、実際に歌舞伎や人形浄瑠璃に出演されている演奏家の方々に、現代の出演システムをご教示いただいた。それは、かなりフレキシブルである印象を受けたが、江戸時代もまた、個々の囃子方がその場に応じた柔軟な対応をしていたと考えられる。今後、様々な史料や分析方法を検討しながら、さらに囃子方の活動傾向を明らかにしていきたい。

注

- 1 演奏者のこと。本論では近世後期の番付史料の表記に基づき、囃子方という表現を採用する。
- 2 歌舞伎の興行毎に発行されるプログラムの役割をする刷り物のこと。興行に関わる全員でなく、主要な人物が記載される。以後、本稿内では役割番付と表記する。
- 3 顔見世興行の際に発行される刷り物。役割番付よりも詳細に、少なくとも興行に関わり舞台に登場する人物についてはほぼ全員を掲載する。江戸においては1年の座組表の役割を果たすが、座組を1年間保持できない上方においては、顔見世時の関係者一覧という意味合いになる。
- 4 個人やグループ等の間に内在する情報や関係性を調査する手法の1種。社会的相互作用を視覚的に明らかにする。
- 5 カール・ピアソン（Karl Pearson, 1857-1936）によって開発された多変量解析法の1種。多変数から複数のメカニズムを分離させ、変数間の因果関係を抽出する方法。principal component analysis（PCA）。
- 6 官許の芝居ではなく、その都度申請し、晴天百日を期限として興行が許可される芝居のこと。官許の芝居である大芝居に対して小芝居と呼ばれる。
- 7 歌舞伎は本来成人前の若衆を出演させることは禁止されていたが、13歳以下の子どもに芝居をさせることを前提に興行した芝居のことを子供芝居という。ただし形骸化しており、実際は通常の芝居と変わりはなく、多くの場合大人の役者が中心となっている。

8 因子負荷率を最適にするために、軸を回転させる方法。バリマックス回転は直行回転によって最適化する一般的な方法である。

#### 参考文献

- 根岸正美 2002 『宮古路節の研究』、東京、南窓社。
- 竹内道敬 2012 『続近世邦楽考』東京、南窓社。
- 武内恵美子 2006 『歌舞伎囃子方の楽師論的研究』、大阪、和泉書院。
- 武内恵美子 2008 「近世大坂の説経讃語芝居における演奏者」『日本研究』37、91-123。
- 武内恵美子・山田奨治 2007 「統計解析を用いた歌舞伎演奏者の活動傾向に関する研究（1）近世上方歌舞伎の場合」『情報処理学会研究報告』9、73-80。
- 武内恵美子 2011 「近世後期上方歌舞伎における囃子方の活動傾向に関する一考察」『秋田大学教育文化学部研究紀要』人文社会科学 66、23-32。
- 前島美保 2009 「上方歌舞伎囃子方の諸相—近世前中期の顔見世番付に基づいて—」『東洋音楽研究』75、53-66。
- 前島美保 2012 『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究：囃子方を中心に』、東京芸術大学博士論文。
- 須山章信 2005 『江戸後期上方劇壇の研究』、東京、おうふう。



【表1】 1858-1867 役割番付劇場別点数表

	角	中	筑後	若太夫	竹田	北新地	堀江	天満	御霊	稲荷	座摩	阿弥陀池	合計	記載率
番付点数	36	28	43	14	24	22	49	61	61	36	26	22	422	
長唄記載点数	31	28	43	12	24	21	48	60	57	36	26	18	404	95.7
義太夫節記載点数	33	28	43	12	24	22	48	61	60	36	26	19	412	97.6

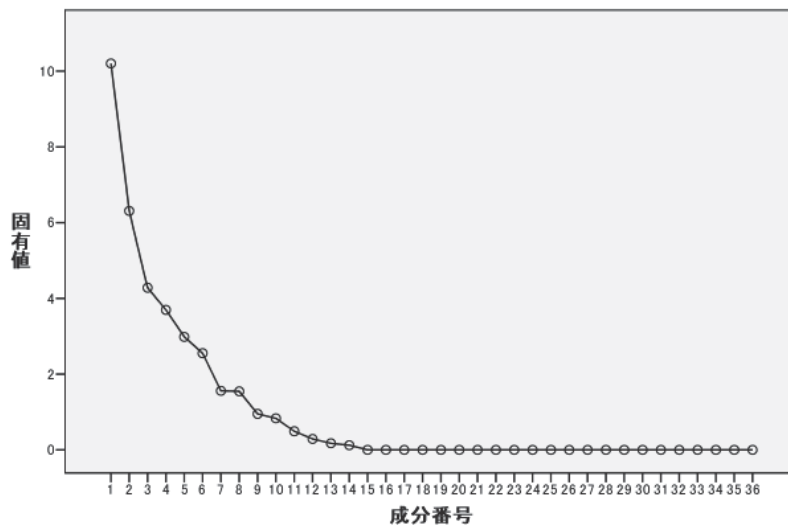
【表2】 代表出演者一覧

噺子方名	ジャンル	役割	件数	集計	役者名	ジャンル	役割	件数	集計
玉村久楽	長唄	唄	74	長唄合計 11名	中村駒之助	役者	役者	52	役者合計 55名
花房半七	長唄	唄	49		市川団次郎	役者	役者	51	
玉村巳午蔵	長唄	唄	28		市川米蔵	役者	役者	50	
岩崎松之助	長唄	唄	17		中村雀右衛門	役者	役者	50	
花房半吉	長唄	唄	15		市川瀧十郎	役者	役者	49	
中村兵次	長唄	唄	15		中村仲助	役者	役者	49	
花房虎蔵	長唄	唄	13		中村紫若	役者	役者	45	
中村伊三郎	長唄	唄	11		実川延三郎	役者	役者	43	
岩崎徳次郎	長唄	唄	11		浅尾朝太郎	役者	役者	42	
花房留次郎	長唄	唄	10		中村千之助	役者	役者	40	
岩崎熊太郎	長唄	唄	10		三舛梅舎	役者	役者	38	
竹本勇太夫	義太夫	太夫	52	義太夫合計 15名	尾上多見蔵	役者	役者	38	
竹本琴太夫	義太夫	太夫	49		市川市十郎	役者	役者	35	
竹本倭太夫	義太夫	太夫	46		三舛源之助	役者	役者	34	
竹本三木太夫	義太夫	太夫	45		嵐三幸	役者	役者	34	
竹本鶴太夫	義太夫	太夫	39		中村翫雀	役者	役者	33	
竹本折太夫	義太夫	太夫	38		尾上松緑	役者	役者	33	
竹本寿太夫	義太夫	太夫	37		市川寿太郎	役者	役者	32	
竹本為太夫	義太夫	太夫	28		浅尾奥山	役者	役者	32	
竹本程太夫	義太夫	太夫	24		浅尾玉六	役者	役者	31	
竹本岡島太夫	義太夫	太夫	23		嵐大三郎	役者	役者	30	
竹本若太夫	義太夫	太夫	18		嵐吉三郎	役者	役者	29	
竹本歌間太夫	義太夫	太夫	17		実川延若	役者	役者	28	
葉璃摩一風	義太夫	太夫	17		嵐京花	役者	役者	28	
竹本千代太夫	義太夫	太夫	14		中山みよじ	役者	役者	27	
竹本瀧太夫	義太夫	太夫	11	中村政次郎	役者	役者	27		
				嵐徳三郎	役者	役者	27		
				藤川鐘九郎	役者	役者	26		
				中村橋之助	役者	役者	25		
				中村巳之助	役者	役者	25		
				市川筆之助	役者	役者	24		
				中村芝蔵	役者	役者	24		
				嵐和橋	役者	役者	24		
				中村琴三郎	役者	役者	23		
				嵐吉右衛門	役者	役者	23		
				実川勇次郎	役者	役者	22		
				片岡我当	役者	役者	22		
				嵐舎丸	役者	役者	22		
				嵐鱗子	役者	役者	22		
				市川鯉三郎	役者	役者	21		
				実川延太郎	役者	役者	21		
				大谷友松	役者	役者	21		
				中村玉芝	役者	役者	21		
				中村梅蔵	役者	役者	21		
				嵐三右衛門	役者	役者	21		

【表3】 太夫—役者 分散の合計

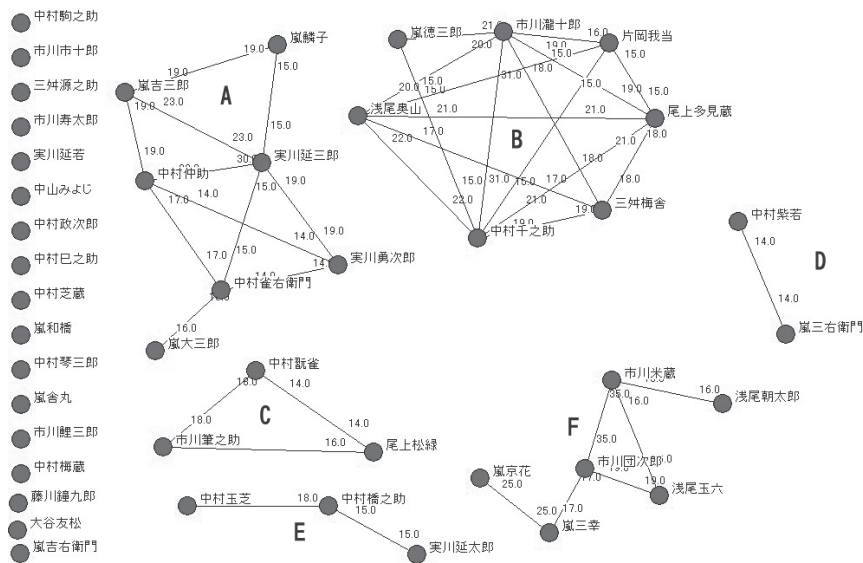
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	10.20	28.34	28.34	10.20	28.34	28.34	5.92	16.43	16.43
2	6.31	17.53	45.87	6.31	17.53	45.87	5.67	15.74	32.17
3	4.28	11.89	57.76	4.28	11.89	57.76	4.46	12.40	44.57
4	3.70	10.27	68.03	3.70	10.27	68.03	4.22	11.72	56.29
5	2.98	8.29	76.32	2.98	8.29	76.32	3.54	9.84	66.12
6	2.55	7.09	83.41	2.55	7.09	83.41	3.49	9.69	75.82
7	1.56	4.33	87.75	1.56	4.33	87.75	2.94	8.16	83.97
8	1.55	4.30	92.04	1.55	4.30	92.04	2.90	8.07	92.04

因子のスクリープロット



【表4】 太夫—役者 スクリープロット

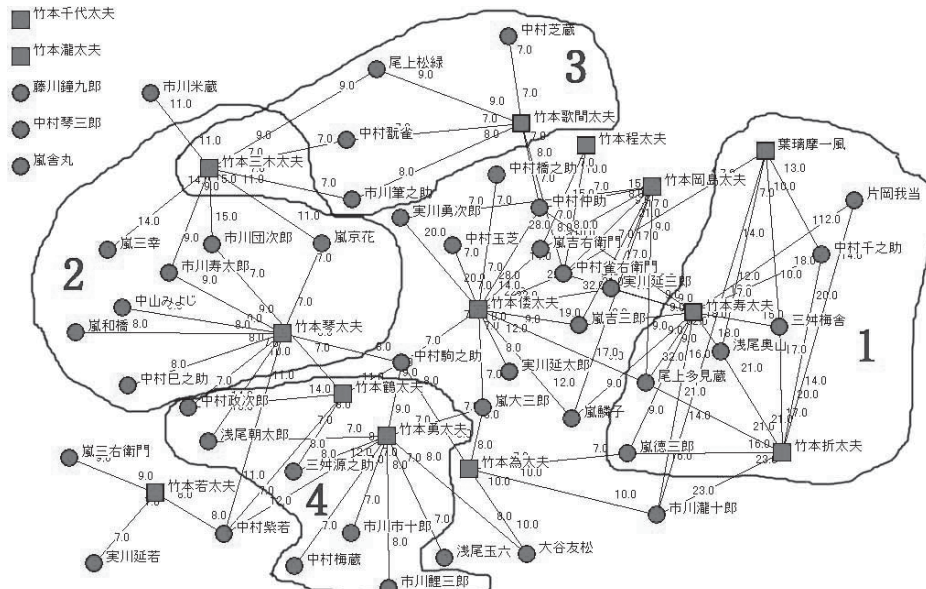
【図1】 役者同士 14回以上 共演関係図 (●は役者、■は太夫)



【表5】 太夫—役者 回転後の成分行列

	成分							
	1	2	3	4	5	6	7	8
片岡我当	.979							
浅尾奥山	.970							
中村千之助	.948							
三舛梅舎	.939							
嵐徳三郎	.918							
尾上多見蔵	.856					.383		
嵐和橋		.953						
市川寿太郎		.923						
嵐京花		.851						
浅尾玉六		.697	.304					
嵐三幸		.696					-.458	
中山みよじ		.642		.434			.353	-.310
藤川鐘九郎		.617	.483				.479	
中村巳之助		.591		.322			.355	-.562
中村翫雀			.925					
尾上松緑			.907					
市川筆之助			.903					
中村芝蔵	-.340		.863					
中村政次郎				.878			-.314	
三舛源之助		.359		.808				
嵐舎丸				.783				
中村梅蔵		.446		.767				
市川鯉三郎				.659				.484
市川市十郎		.444	.442	.592				
中村橋之助					.923			
中村玉芝					.916			
実川延太郎					.870	.314		
嵐吉三郎						.941		
嵐鱗子						.931		
嵐吉右衛門					.399	.769		
実川勇次郎					.568	.745		
嵐大三郎			.311				.861	
大谷友松				.335			.747	.351
実川延若							.300	-.796
嵐三右衛門								-.743
中村琴三郎							.344	.736

【図2】 太夫—役者 7回共演関係図と主成分対応 (●は役者、■は太夫)

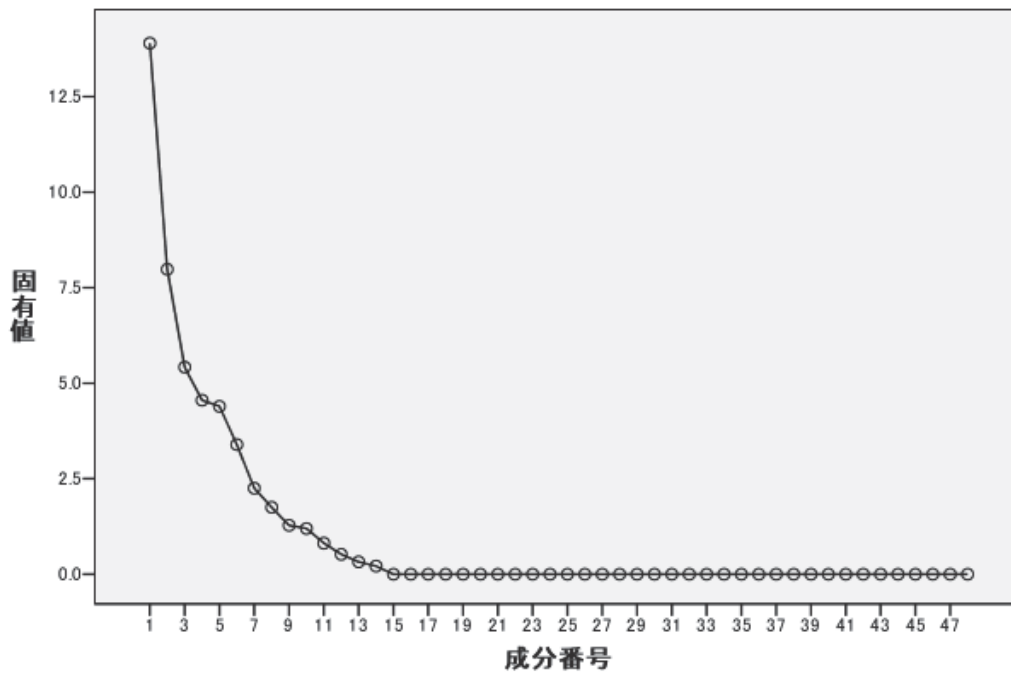


【表6】 太夫—役者・小屋 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	13.90	28.96	28.96	13.90	28.96	28.96	7.67	15.99	15.99
2	7.98	16.63	45.59	7.98	16.63	45.59	7.39	15.40	31.39
3	5.42	11.29	56.88	5.42	11.29	56.88	5.09	10.61	42.00
4	4.55	9.49	66.37	4.55	9.49	66.37	5.00	10.42	52.42
5	4.39	9.16	75.52	4.39	9.16	75.52	4.87	10.15	62.58
6	3.39	7.07	82.59	3.39	7.07	82.59	4.15	8.64	71.21
7	2.25	4.69	87.29	2.25	4.69	87.29	3.55	7.40	78.62
8	1.75	3.65	90.94	1.75	3.65	90.94	3.50	7.28	85.90
9	1.28	2.67	93.61	1.28	2.67	93.61	2.59	5.40	91.30
10	1.20	2.49	96.10	1.20	2.49	96.10	2.30	4.80	96.10

【表7】 太夫—役者・小屋 主成分分析スクリープロット

因子のスクリープロット





【表8】 太夫—役者・小屋 回転後の成分行列

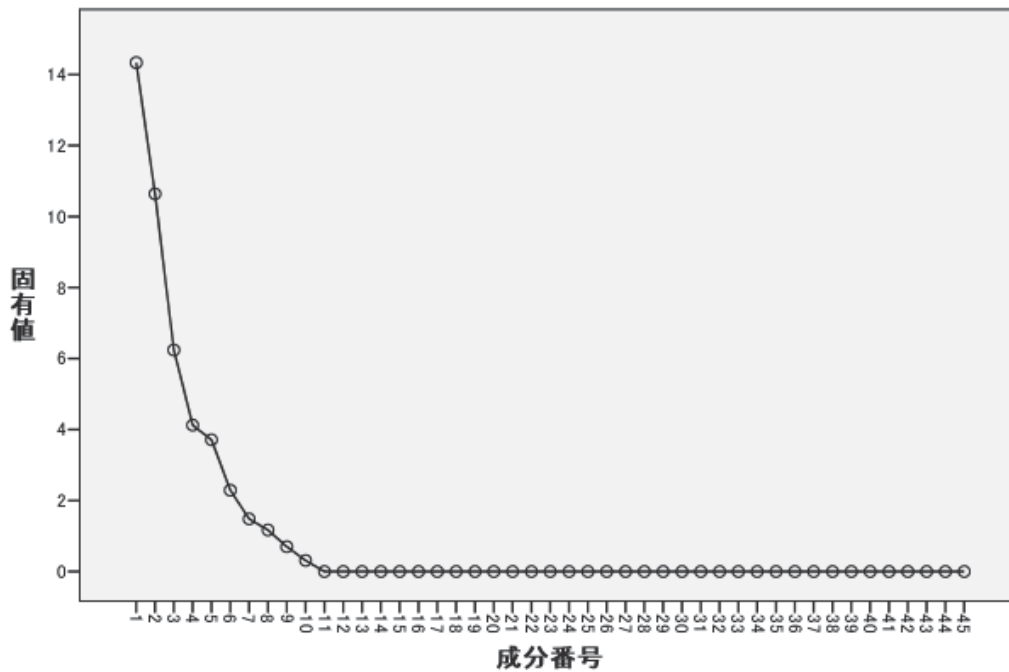
	成分										備考	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
嵐和橋	.939											2→1 —浅尾玉六 順序変動あり
嵐京花	.898											
市川寿太郎	.883											
北新地	.874		.351									
天満	.837							.355	.307			
阿弥陀池	.754		.546									
嵐三幸	.737					-.332						
中村巳之助	.628					.444		-.308	.321			
中山みよじ	.609		.303			.406				.418		
藤川鐘九郎	.540				.465	.419				.323		
片岡我当		.979										1→2 順序変動なし
浅尾奥山		.972										
角		.955										
中村千之助		.953										
三舛梅舎		.942										
嵐徳三郎		.919										
尾上多見蔵		.852		.375								
中村政次郎			.927									4→3 —市川鯉三郎 順序変動なし
御霊		-.374	.840									
三舛源之助	.308		.692					.352		.315		
嵐舎丸			.685			.554						
若太夫			.684									
中村梅蔵	.387		.594					.454		.413		
市川市十郎	.338		.508		.417					.490		
嵐吉三郎				.966								6→4 順序変動なし
嵐鱗子				.938								
中				.913		.328						
実川勇次郎				.804		.486						
嵐吉右衛門				.796		.332						
市川筆之助					.913							3→5 順序変動あり
中村翫雀					.913							
尾上松緑					.913							
中村芝蔵		-.337			.836				.305			
嵐大三郎						.870						7→6 順序変動なし
大谷友松						.797		.459				
堀江					.362	.780						
筑後					.465	.610			.468	.318		
中村橋之助							.915					5→7 順序変動なし
中村玉芝							.913					
実川延太郎				.399			.830					
中村琴三郎								.733	-.372			8→8 +市川鯉三郎 順序変動なし
竹田		.556						.726				
市川鯉三郎			.490					.711		.328		
いなり	.408		.398					.643				
嵐三右衛門									.868			(7.5)→9 順序変動あり
実川延若									.835			
座摩	.456					.300				.620		(2)→10 新規
浅尾玉六	.550							.365		.572		

【表9】 長唄—役者 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	14.33	31.85	31.85	14.33	31.85	31.85	13.16	29.24	29.24
2	10.64	23.64	55.49	10.64	23.64	55.49	9.29	20.65	49.90
3	6.24	13.87	69.36	6.24	13.87	69.36	7.31	16.23	66.13
4	4.12	9.16	78.52	4.12	9.16	78.52	3.81	8.47	74.60
5	3.71	8.25	86.77	3.71	8.25	86.77	3.33	7.41	82.01
6	2.29	5.09	91.86	2.29	5.09	91.86	3.00	6.67	88.68
7	1.48	3.30	95.15	1.48	3.30	95.15	2.33	5.17	93.84
8	1.17	2.60	97.75	1.17	2.60	97.75	1.76	3.91	97.75

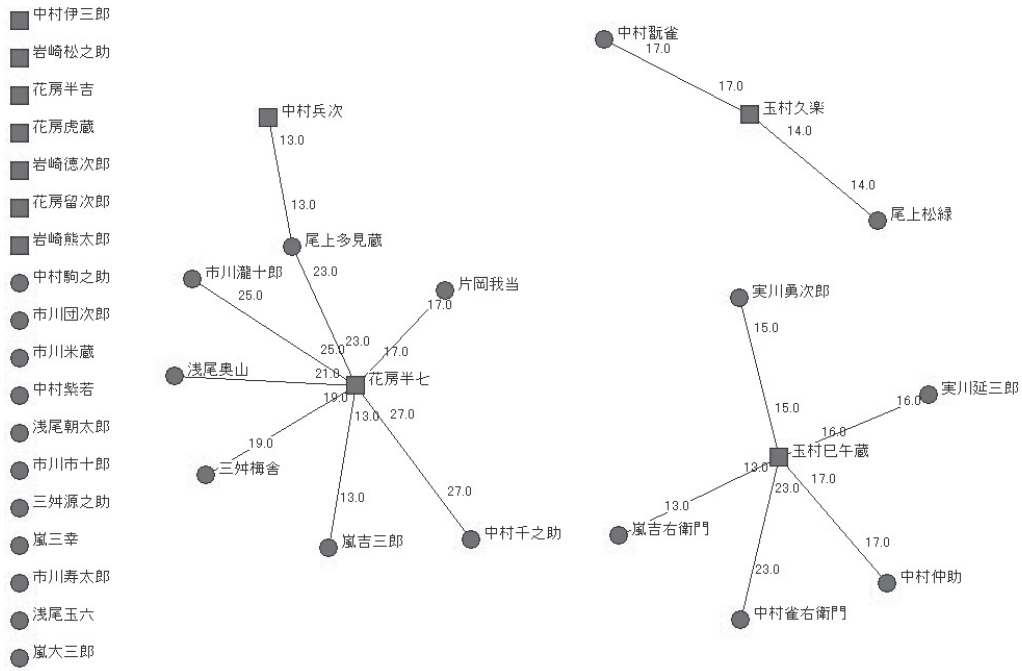
【表10】 長唄—役者の主成分スクリープロット

因子のスクリープロット



【表10】 長唄一役者 回転後の成分行列

	成分							
	1	2	3	4	5	6	7	8
市川鯉三郎	.980							
市川寿太郎	.971							
中村琴三郎	.953							
嵐京花	.947							
中村翫雀	.941							
市川筆之助	.914				.375			
尾上松緑	.892				.385			
大谷友松	.890				.340			
中村芝蔵	.863		.450					
嵐三幸	.852							
市川団次郎	.838							.492
市川米蔵	.815							.385
嵐舎丸	.814	.455						
市川市十郎	.683					.670		
嵐大三郎	.663		.561		.448			
中村干之助		.993						
三舛梅舎		.987						
浅尾奥山		.985						
市川瀧十郎		.980						
片岡我当		.964						
尾上多見蔵		.930						
嵐徳三郎	.320	.919						
嵐鱗子		.834	.532					
嵐吉三郎		.791	.594					
実川勇次郎			.982					
嵐吉右衛門			.979					
中村雀右衛門			.937					
中村仲助		.367	.910					
実川延三郎		.459	.835					
中村橋之助	.492		.617	.574				
嵐三右衛門				.962				
中村巳之助				.930				
中村紫若		-.319		.867				
浅尾朝太郎	.453				.821			
実川延若			.380	.362	.783			
中村玉芝			.576		.732			
中村駒之助			.368			.853		
中村梅蔵			-.317		-.333	.775		
浅尾玉六						.680		.455
中村政次郎						.571	-.446	-.492
中山みよじ	.471						.791	
三舛源之助	.385				.439		-.709	
藤川鐘九郎	.466				.411		.688	
嵐和橋	.382		-.307	-.395			.433	
実川延太郎		.397			.403			.754

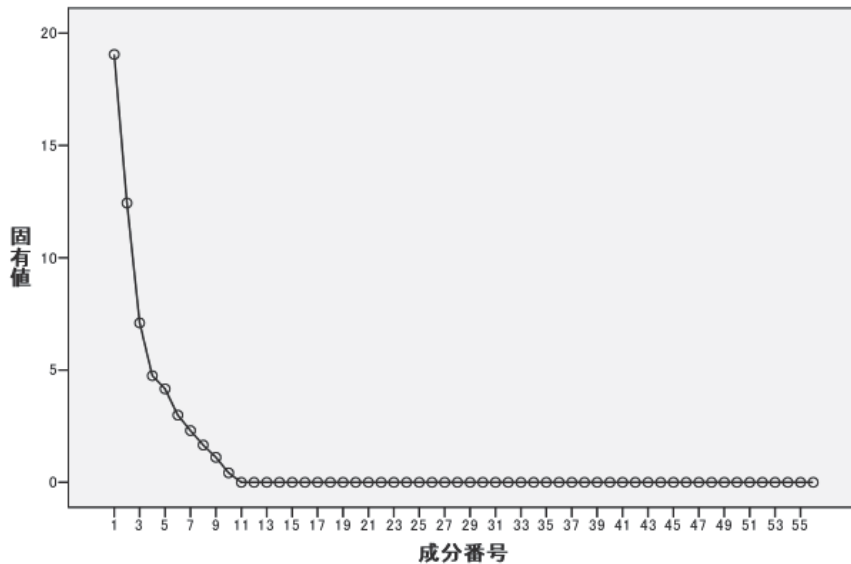


【図3】長唄 唄一役者 13回以上共演関係図（●は役者、■は唄）

【表11】長唄一役者・小屋 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	19.05	34.03	34.03	19.05	34.03	34.03	17.58	31.40	31.40
2	12.44	22.21	56.23	12.44	22.21	56.23	10.57	18.87	50.27
3	7.10	12.67	68.91	7.10	12.67	68.91	8.50	15.19	65.45
4	4.75	8.48	77.39	4.75	8.48	77.39	4.26	7.60	73.06
5	4.16	7.43	84.82	4.16	7.43	84.82	4.21	7.52	80.57
6	3.00	5.35	90.17	3.00	5.35	90.17	4.03	7.20	87.77
7	2.31	4.12	94.29	2.31	4.12	94.29	2.83	5.06	92.83
8	1.66	2.97	97.26	1.66	2.97	97.26	2.15	3.84	96.67
9	1.11	1.99	99.24	1.11	1.99	99.24	1.44	2.58	99.24

【表12】長唄一役者・小屋 分散のスクリープロット  
因子のスクリープロット





【表13】 長唄一役者・小屋 回転後の成分行列

	成分									備考	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
市川寿太郎	.965										1→1 —市川市十郎 順序変動あり
市川鯉三郎	.958										
若太夫	.950										
嵐京花	.945										
中村翫雀	.932										
中村琴三郎	.927										
座摩	.911										
市川筆之助	.899				.411						
尾上松緑	.887				.423						
嵐三幸	.885									-.374	
竹田	.884	.353									
大谷友松	.883				.364						
中村芝蔵	.865		.434								
天満	.853							-.357	.310		
嵐舎丸	.834	.432									
市川団次郎	.814						.543				
市川米蔵	.787						.408				
堀江	.771		.302							-.404	
北新地	.730		.370					.342			
嵐大三郎	.646		.554		.478						
角		.991									2→2 順序変動なし
中村千之助		.990									
三舛梅舎		.987									
浅尾奥山		.979									
市川瀧十郎		.974									
片岡我当		.963									
尾上多見蔵		.929									
嵐徳三郎	.354	.905									
嵐鱗子		.814	.550								
嵐吉三郎		.776	.618								
実川勇次郎			.987								3→3 —中村橋之助 順序変動なし
嵐吉右衛門			.981								
中村雀右衛門			.940								
中村仲助		.339	.914								
中		.399	.899								
実川延三郎		.445	.850								
御霊				.961							6→4 +市川市十郎 順序変動あり
中村駒之助			.388	.838							
市川市十郎	.655			.741							
中村梅蔵				.734	-.329						
中村政次郎				.684			-.303	.472			
浅尾玉六				.671			.632				
浅尾朝太郎	.422				.826						5→5 順序変動なし
実川延若			.356		.819	.337					
中村玉芝			.566		.734						
筑後	.548				.672	.423					
嵐三右衛門						.980					4→6 +中村橋之助 順序変動なし
中村巳之助						.938					
中村紫若		-.324				.837					
中村橋之助	.481		.601			.607					
いなり							.957				8→7
実川延太郎		.413			.432		.724				
三舛源之助	.326			.359	.355			.751			7→8 —嵐和橋 順序変動あり
中山みよじ	.495							-.669			
藤川鐘九郎	.473				.484			-.538			(7)→9 独立
嵐和橋	.380		-.301						.687		

【表14】 長唄 主成分得点によるクラスター分析 デンドログラム						
Rescaled Distance Cluster Combine						
C A S E	0	5	10	15	20	25
Label	Num	+-----+-----+-----+-----+-----+				
花房半七	2	-+-----+				
中村兵次	6	-+-----+				
岩崎熊太郎	11	-----+-----+				
岩崎徳次郎	9	-----+-----+				
玉村巳午蔵	3	-----+				
岩崎松之助	4	-----+				
玉村久楽	1	-----+-----+				
花房留次郎	10	-----+-----+				
花房虎蔵	7	-----+				
中村伊三郎	8	-----+				
花房半吉	5	-----+				

【表15】 長唄 クラスター凝集経過工程						
段階	結合されたクラスター		係数	クラスター初出の段階		次の段階
	クラスター 1	クラスター 2		クラスター 1	クラスター 2	
1	2	6	3.405	0	0	2
2	2	11	11.238	1	0	3
3	2	9	20.423	2	0	5
4	1	10	30.145	0	0	6
5	2	3	40.036	3	0	9
6	1	7	50.010	4	0	7
7	1	8	60.002	6	0	8
8	1	5	70.001	7	0	10
9	2	4	80.000	5	0	10
10	1	2	90.000	8	9	0

# **A study of Kamigata kabuki musicians in the late Edo period: relations with actors and theaters**

TAKENOUCHI Emiko

In the late Edo period, Kamigata kabuki provided work for numerous musicians. These are generally known to have been hired by actors, but the criteria for and manner of hiring have yet to be investigated. This study examines these motivating factors, using principal component analysis, cluster analysis, and social network analysis.

The study found different tendencies between Gidayū and Nagauta shamisen performers: Gidayū performers – often more than one – tended to have direct working relations with individual actors. Nagauta performers, on the other hand, tended to be individually linked to the actor's theater rather than to the actor directly. A factor analysis of the appearance of these musicians along with the actor and theater does not reveal any tendency to favour one or the other relationship.

From these results, I conclude that the musicians were professionally flexible, and were not fixed to one actor, theater, or organization.

Keywords; Kamigata kabuki, musician, actor, theater, the principal component analysis

